

「生誕130年記念 高島野十郎展」では、独学で油彩を描いた孤高の画家、高島野十郎（たかしま・やじゅうろう 1890-1975）を紹介し、野十郎は、ただ一本の蠟燭などに「写実」を追求する魂を込めました。昨年の生誕130年を記念して、新発見作品を含む90点によって、旅の足跡をたどるなど、新たな高島野十郎像に迫ります。この展覧会は福岡県立美術館の約120点に及ぶコレクションから44点を展示しています。福岡県立美術館学芸員の高山百合さんに、野十郎と福岡県立美術館の40年のあゆみについてうかがいます。

—今日全国的な人気の高島野十郎ですが、生前知られていなかったとか？どのように「発見」されたのですか？

高山：福岡県立美術館の前身にあたる福岡県文化会館で、1980年に開催された「近代洋画と福岡県」という展覧会において、青木繁や坂本繁二郎など福岡県ゆかりの錚々たる洋画家による名作の中に、本展でも紹介している野十郎の《すいれんの池》という作品が初めて展示されました。細やかな写実的表現でありながら、時間が止まっているかのようにも思われる白日夢のような雰囲気を感じさせるこの作品の不思議な魅力に、多くの方が強烈にひきつけられたと言います。生前にどこでどんな活動をしていたのかも、作品がどこに伝わっているのかも全くわからないなかで、当時の学芸員が関係者の元を訪ねてまわり、その足跡を丁寧に追っていくという地道な調査研究活動を行いました。そして以後彼の回顧展を開催するたびに、徐々に高島野十郎という画家の姿が紐解かれていきました。その結果、現在では非常に高い人気を誇る、福岡県を代表する作家のひとりとなりました。

—福岡県立美術館において、これだけ多くの野十郎作品を収蔵することができた理由は？

高山：当館において、幾度となく開催してきた展覧会を通して様々な情報が集まったのと同時に、作品の所在が明らかになり、コレクションへとつながりました。また野十郎は家族を持つこともなく、画壇との距離も置いていましたが、決して孤独であったわけではなく、彼の友人などの周囲の親しい人に支えられ、愛されてきたことで、孤高の画業を貫くことができました。それらの人々が、野十郎の思い出とともに大切にしてきた作品が当館に受け継がれて、今日に至り、福岡県立美術館は野十郎のコレクションによって全国的に知られる美術館となることができましたし、当館のコレクションだけで野十郎の画業のほぼすべてを辿ることができるまでになりました。

—今回の展示作品の中で特におすすめの作品を3点選んで、その理由を教えてください。

高山：すべて当館所蔵の《からすうり》、《月》、《蠟燭》の3点です。彼の郷里の地で描かれた《からすうり》は、近年発見されたのちに、当館のコレクションに加わりました。安定感のある構図でありながらも、戦前期の野十郎作品の特質でもある、妖艶な魅力に溢れた作品になっています。また、《月》と《蠟燭》は「光と闇」をテーマに多くの絵を描いた野十郎の真骨頂ともいえる作品です。「月ではなく闇を描きたかった。闇を描くために月を描いた。」と野十郎は言いましたが、「闇そのもの」、「光そのもの」を描こうとした野十郎のストイックな姿勢を垣間見ることができる作品です。また、《蠟燭》は野十郎のトレードマークともいえる作品です。生涯にわたって描き続けられた《蠟燭》は、親しい人に感謝の気持ちをこめて贈られたものでした。とても小さな作品ですが、絵をじっと見つめると、炎の揺らぎや温度、そして彼の思いまでも伝わってきて、温かい気持ちになる作品です。

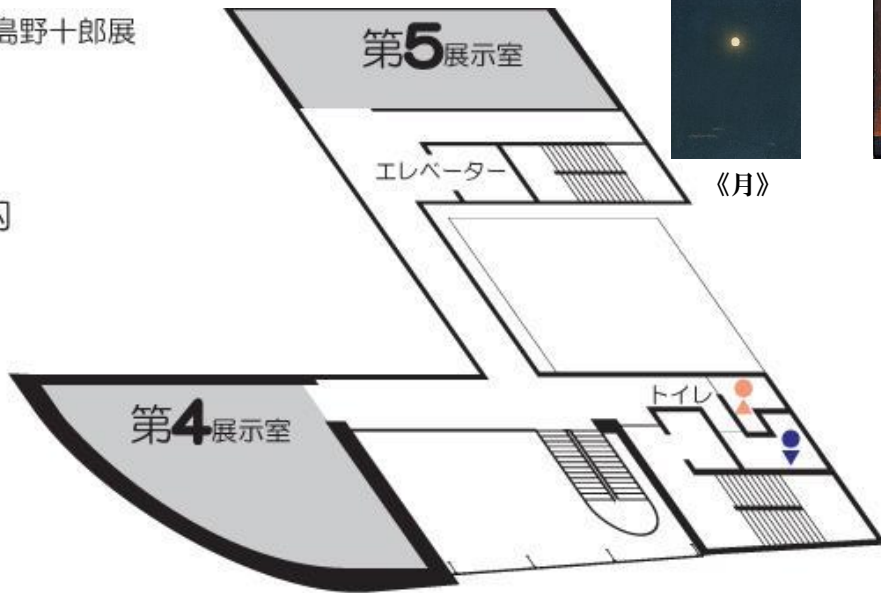
—全国5会場を巡回した今回の展覧会。最終会場の高崎の皆さまに、ぜひ一言お願いします。

高山：「生誕130年記念 高島野十郎展」は、彼の生まれ育った久留米、晩年を過ごした千葉県柏市というゆかりの地だけでなく、奈良市、岡山県瀬戸内市、そして高崎市という初めての場所でも開催することができました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中で様々な難しい局面はありましたが、彼の作品に初めて出会った方たちにもきっと伝わる充実した内容になっていると思います。また、このような不穏な時代だからこそ、絵を描くことに対する野十郎のストイックな姿勢や、生き方、そして時代が変わっても決して色あせることのない作品の強度に、より一層共鳴する方も多いのではないかと思います。展覧会場で、ぜひ野十郎作品とじっくりと対峙していただければと思います。

生誕130年記念 高島野十郎展

展示室のご案内

3階

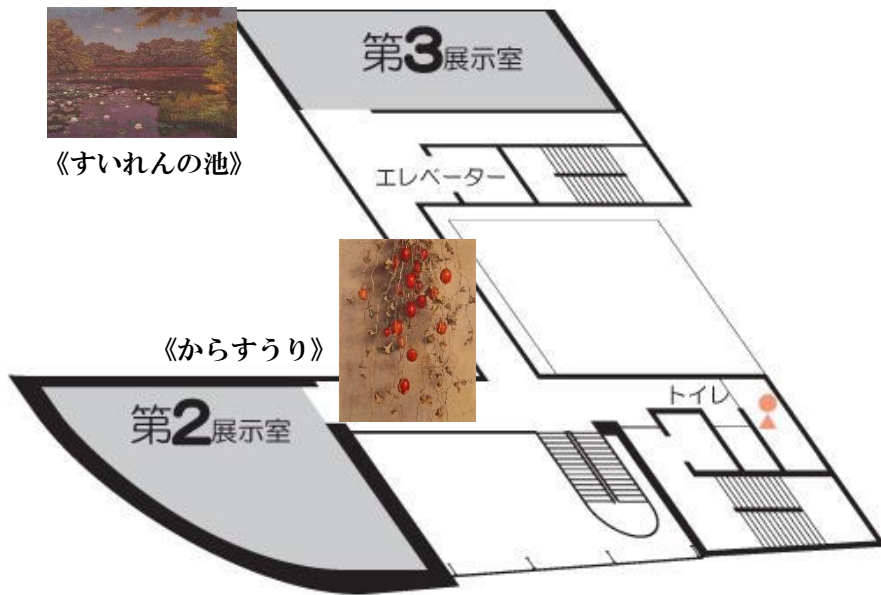


《月》



《蠟燭》

2階

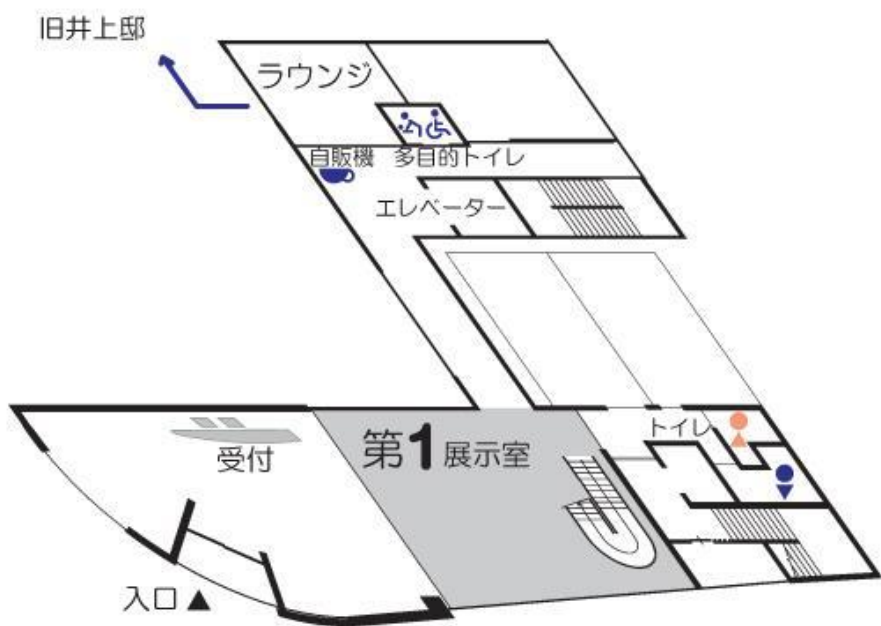


《すいれんの池》



《からすうり》

1階



高崎市美術館  
TAKASAKI MUSEUM OF ART